

二〇二二年度 第一回 入学 試験 問題

適性検査Ⅰ（三鷹型）

試験時間 四十五分

注 意

- 1 問題は **1** のみで、7ページにわたって印刷してあります。
- 2 声を出して読むではいけません。
- 3 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、問題用紙と解答用紙を提出してください。
- 4 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 5 **受験番号**を解答用紙の決められたらんに記入しなさい。

佼成学園女子中学校

受験番号	
------	--

1

「文章A」と「文章B」を読み、あとの問題に答えなさい。

(※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

〔文章A〕

クラスの緊張の糸が切れたのは、水曜日だった。

その日の五時限目はいつもの委員会活動はなく、全校男女に分かれた練習が行われた。男子はグラウンドで組み体操、女子は体育館でチアダンスの練習だ。

帰りのホームルーム前、兼家さんが立ちあがって訴えた。

「だれか、クラス看板の製作を手伝ってくれませんか？」

クラス看板は応援席の前に立てる看板で、来賓者によって美術点をつけられる。看板だけでも最優秀賞と優秀賞が表彰されるうえ、競技で獲得した点数に加点されるから、クラスの勝利に関わってくる。ぼくたちのクラスでは美術部の兼家さんが製作を担当していたが、あと二日では仕上がりにくいという。

「なんで間に合うように、計画的にやらないんだよ」

岡本がつぶやいたのを、及川さんは聞き逃さなかった。

「その言い方はないでしょ」

「ひとり言に、いちいち取りあうなよ」

「はあっ？」

そのとき、※ヨワキーが教室に入ってきた。

及川さんが、ガタンツと立ちあがる。

「先生。わたし、ムカデ競走のリーダーを降ります。もう、やってら

れません」

ヨワキーは少し間をあけて、うんと、うなずいた。

「及川さん、がんばりすぎるほど、がんばっていますからね。きついですよね」

言葉を区切って、ふーっと息をつく。

「みなさん、新しい環境でとてもがんばってきましたから、そろそろ疲れがピークに達するころだろうと思っていました。そんななかで及川さんや岡本さんはクラスの責任を負うのですから、なおのこときついでしょう」

岡本？ 岡本はいまの状況をつくった元凶だって。ヨワキーはなにか勘ちがいでいるんじゃないか？

疑問を持ったのはぼくだけじゃなかったようで、ほかにも首をかしげた人がちらほら見えた。

「運動会でクラス対抗競技を行うのは、勝利が目的ではありません。団体競技では人間関係の摩擦や衝突がつきものですが、その経験が成長につながるがあります。でも、クラス全員がたらくてやりたくないというなら、棄権したっていいんです。私から校長に申しれましょう」

は？ ヨワキー、なに言っちゃってんだよ。

みんなが、ざわついた。

「マジかよ」

「そんなこと、できんの？」

「そしたら、うちのクラスは総合優勝も狙えないってことだよな？」

「個人競技だけ？ 出番少なくて、つまんなーい」

ぼそぼそと話す声が聞こえる。

ぼくは、みんなとはちがう意味で心配になった。

ヨワキー、そんな勝手なことをしたら、ますます※ウエッティーに
らまれるんじゃないの？

すると、菊池さんが「あの」と、手をあげた。

「ここまで引っぱってくれたのは、菜月……及川さんなので、及川さんが降りるなら、わたしは競技に出なくていいと思います。でも、棄権して一番責任を感じるのは、及川さんだろうと思うんです。及川さんの気持ちが決まるまで、棄権するかどうかの決定は、待ってもらえませんか？」

ヨワキーがうなずき、みんなに問いかけた。

「ほかに意見はありますか？」

だれも、なにも言わない。及川さんはだまって、机に目を落としていた。

「では、返事を待ちます。なにか言いたいことがあるなら、個別に聞きます」

「先生、明日の朝練はどうなるんですか？」

だれかが聞くと、ヨワキーはメガネを押しあげた。

「明日は、休みにします」

また、ざわつく。

ぼくは、明日はピリピリした空気から逃れられると、ほっとした。

翌朝、ぼくは朝練と同じ七時半に登校した。当番の水やりをする前に、給食室脇の挿し芽を見ようと思ったからだ。このところ運動会の練習ばかりで世話をしていなかったし、昨日も委員会活動がなかったから気になった。

正門のペントラスとペチュニアは、だいぶ元気になっていた。家から持ってきた剪定バサミで咲き終わった花を切りながら、様子を見る。奥のペントラスは上に伸び、手前のペチュニアは葉が増えて横に広がり、花数も増えていた。ピンク、青紫、白がやさしく目に映る。

なんだろう、心の中がふわふわしたものに満ちて、ほほ笑みたくなるこの気持ち。花をかわいと思うなんて、ふとまゆセンパイに毒されたかな。

『ぱくんじゅ、ヒュヒュー！ ぱくんじゅ、ヒュヒュー！ ぱくんじゅ
ほーていええーいとお♪』

ふとまゆセンパイの歌が頭の中で鳴る。ふっと鼻息がマスクに当たり、ほおの筋肉が動くのを感じた。

そういえば、笑ったの、ひさしぶりかもしれない。花のおかげで、張りつめていた気持ちが少しゆるんだのかな。

ぼくは頭の中でふとまゆセンパイの歌をリピートしながら、西棟の角を曲がった。

「あ……」

しゃがんで挿し芽を見ていたヨワキーが、顔を上げた。

「おはようございます。木下さん、早いですね」

「あ、はい。挿し芽を見ようと思って……」

ヨワキーが、挿し芽をつまんだ。

「根が張ってますね。そろそろ花壇かだんに植えかえられますよ」

「そうですか」

ぼくはヨワキーのとなりにはやがんだ。ヨワキーが、ぼくの顔を見る。

「木下さんは、大丈夫ですか？」

「は？」

マスクをしているから、体調を心配されたのだろうか？

ヨワキーは挿し芽に目を落とすと、ビニールポットの土を人さし指で触さわった。

「安田先生が木下さんのこと、気にしてました。ちょっと疲れているんじゃないかって。中一ギャップとって、小学校とのちがいか、いろいろなことについていけなくなる生徒がいるので、安田先生も心配しているんです」

え……。

ぼくは言葉につまった。まさか安田先生がぼくを気にかけているなんて、思いもしなかった。単にきびしいだけの生活指導の先生ではないのか？

「はあ、まあ、大丈夫です」

当たりさわりのない返事だけど、うそではなかった。きっぱり元気とは言えないけど、枯かれるほどダメなわけじゃない。

ヨワキーがほほ笑んだ。

「そうですよね。本当にダメなときは自分のことで精一杯せいいつぱいで、植物ま

で気が回らないですよね」

ぼくは、はっとした。

確かにそうかもしれない。一番しんどかったときは自分だけが不幸でつらい気がして、ほかのことまで思いいたらなかった……。

「でも、つらいと思うことがあったら、すぐに相談してください。問題は長引くと複雑になります。早めに対処したほうが、解決しやすいものです」

「はい」

ぼくが答えると、ヨワキーはパツパツと手をはたいて立ちあがった。「今日は夕方から雨になるようですよ。土曜日は曇くもりの予報ですが、運動会にはちょうどいい天気です」

立ち去ろうとしたヨワキーに、ぼくは思わず聞いていた。

「あの、ムカデ競走はどうなるのでしょうか？」

ヨワキーがふり返って、メガネを押しあげた。

「まだわかりません」

ぼくの目が不安そうに見えたのか、ヨワキーは大丈夫というようにうなずいた。

「栽培委員会を担当するようになって、園芸と教育は似ているなあと思っただけです」

にこにこしながら、言葉が続ける。

「植物は水や肥料をやりすぎると、枯れてダメになる。毎日よく観察して、おかしいと思ったらときに手をかけるといいそうです。ムカデ競走ムカデ競走のもめごとは、※天地返してんちがえしのようなものでしょう。きつと空気が入れ

かわって、いい土になる。そう私は信じています」

ぼくは「はあ」と、気の抜けた息をもらした。

ヨワキーはやっぱり先生だと思った。見た目は大学生みたいだし、ベテランの先生にしかられたりもするけど、自分なりの信念を持っているんだ。勇気って名前、実はぴったりなのかもしれない。ヨワキーなんて勝手に呼んで、悪かったな。

「今日は水やりは、必要なさそうですね」

ヨワキー……じゃなくて早川先生が去ったあと、ぼくは挿し芽の土を触った。

しっとり湿っている。昨日、だれかが水をやったんだ。

ぼくが知らないだけで、だれかがだれかを見守っていて、必要なきに手を差しのべているのかもしれない。

孤立していた五年生のとき、ある男子とたまに目が合った。気の毒そうにぼくを見る表情が嫌で、すぐに目をそらしたけど、もしかしたらぼくを心配してくれていたのかもしれない。

いまとなつては確かめようもないけど、ぼくが感じたり、思ったりしたことだけがすべてじゃないだろうな。

ぼくは指先についた土を払って、立ちあがった。

(xxxxxxあり「天地ダイアリー」)

〔注〕

※ヨワキー……「ぼく」のクラスの担任である早川先生の名。

※ウエツティー……学年主任である上野先生の名。

※天地返し……園芸用語で、上下の土の層をひっくり返して逆にする。

〔問題1〕

ムカデ競走のもめごとは、天地返しのようなものでしょうとは、この場合、どのようなことを表していますか。四十五字以上五十五字以内で説明しなさい。ただし、あとの〈注意〉にしたがうこと。

〔問題2〕

ぼくが感じたり、思ったりしたことだけがすべてじゃないだろうなとありますが、このことについて、あなたが経験したことや、見聞きした具体例をあげながら百八十字以上二百字以内で説明しなさい。ただし、次の〈注意〉にしたがうこと。

〈注意〉

- ・段落を設けず、一まず目から書きなさい。
- ・、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。この場合、最後のます目に書いた文字と記号で一字と数えます。
- ・。と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、。で一字と数えます。

〔文章B〕

江戸時代の正直一徹のくずやのはなし。

「井戸の茶碗」というのは、朝鮮の高麗茶碗で、雑な茶碗でした。ところが日本では、茶人にこのまれ、珍重されるようになり、名器とされるものが出現しました。

江戸時代、麻布の茗荷谷にくずやの清兵衛さんとよばれる人がいました。たいへんな正直者で、まがったことが大嫌い。まがったものを見るだけで、腹がたつ。路地をまがるのも、ほんとはまがりたくない。けれども、路地に入らないと商いが成り立たない。

まわりから、正直清兵衛とアダナされていきました。毎日、朝早くから一日いっぱい働く人でした。

ある日、(現在の東京港区にある)清正公様のわきで呼び止められて、くずを買う。そのおり、ついでに仏像をぜひ買ってくれとせがまれる。今は浪人の元武士らしいその男から、生活にこまっでどうしても二百文いるといわれる。くずもの以外は買ったことがなく、くずやは、その仏像を預かることにする。

「じゃあ、こういたしましたしょう。この仏像をね、二百文で預かりましょう。それより高う売れたら、その半分をこちらにお届けにあげます」

そうして、細川屋敷のおもて長屋にくると、二階の窓から呼び止める者がいる。

(長屋と聞いて想像できますか。江戸時代の集合住宅。アパートで

す。)

「その方のかついでおる籠のなかに、なにやら仏像のようなものはいっておるが、それはなんだ」

「へえ、仏像でございます」

「おお、なんでできておるのだ。じつは、仏壇をこしらえたが、仏像がない。もし気に入れば、それを買いたい」

ということになり、三百文で売買が成立。

買った武士は、そのすすけた仏像を、塩で清めて、ぬるま湯であらう。

すると、お腹から小判がでてきた。ぜんぶで五十両。

「拙者はこの仏像を買ったが、なかの小判は買ったおぼえがない。仏像を売り払うくらいだ、持ち主はさぞかし暮らしむきもよくないであろう。もとの持ち主にかえてやりたいが、さて、どうしたものか」

そこで、例のくずやが窓下を通るのを、待つことに。

何日かたって、ついにそのくずやがあらわれる。

くずやは、細川の家臣・高木佐久左衛門と名乗る武士から、五十両をあずかり、浪人のところへ届けに行く。

「あ、いやいや、そのようなことをせんでもよい。そちらにしまっておきなさい」

「いいえ、あたくしの気がすみませんから、どうぞこれはおさめてくださいまし」

押し問答のすえ、浪人はすべてを受け取り、感謝のしるしに、茶碗

を武士にプレゼント。

その茶碗がまわりまわって、殿様のお目にかない、専門の鑑定家の鑑定の結果、「井戸の茶碗」という名器と判明。殿様に三百両で買い上げられることになります。

その半分の一五〇両が浪人の元にとけられ、浪人はその金を受け取るかわりに、娘を武士に娶ってもらうことに。浪人は娘の嫁入りのしたく金として一五〇両を使い、その武士の元に娘をとつがせる。万事めでたし、めでたし。

この落語の最後のオチは、くずやと武士の会話になっています。

どちらがくずやで、どちらが武士か、想像してみてください。

「そうなさいよ。けっこうなことですよ。そりゃあ今はね、長屋にいますから、ちよいとくずぶつてますがね。こちらにつれてきて、みがいてごらんさい、いい女になりますよ」

「いやあ、みがくのはよそう。また小判が出るといけない」

「井戸の茶碗」のあらすじを急いでたどりましたが、これでは、名作の味がわずかしか伝わりません。志ん生か志ん朝の名演をぜひお聴きください。

ぼくがここに紹介した意図は、登場したくずや、浪人、武士たちの人間らしさ、その人情の機微の美しさが、「相手を思いやる豊かな想像力」に支えられていることを、わかっていた点にあります。

人間が動物とちがう点。相手を思いやる心、胸打つ人間らしさが奈

辺(どこ)にあるか、それを※しかと捉えてほしいと願うからです。

自分がこんなことをされたらどんな感じがするか。立場を逆にして、相手の立ち位置にたつて、想像してみるこの大切さ。宮本武蔵がしたように、「いったん立ち止まって、相手の立場から自分を見つめる」。そして想像力をフル回転させる。

反対に、人間らしい想像力が貧しいと、どういうことになるでしょうか。

人のものを盗る、人をいじめる、だます、殴る、殺す……、これはもう、人間のすることではありませんね。

さて、想像するということは、なにも落語を聴く時とはかぎりません。まんが、童話、小説を読む時、テレビドラマ、映画を見る時、「想像描く力」が足りない、ストーリーをたどることができなくなりま

す。日常生活においても、想像力が欠けていると、おもわぬことが発生します。

たとえば、ここにくずかごがあります。紙くずを捨てる分には問題ありませんが、ケーキとかクリームで汚れた紙を捨てたとき。籠がいつぱいになってゴミに出すまでに一か月もあつたら、くずかごにアリが来るかもしれません。ゴキブリがひそむかもしれません。それを想像できる人は、べとべと汚れた紙を、そのまま捨てるようなことはしませんね。

アリやゴキブリがたかるのを想像できずかできないかは、算数や数

学の問題が解けることとは、関係ありません。

苦労は金を出してでもするものだ、といいます。

「なんでも見てやろう」と、外国までひとり旅に出た人がいました。人間を観察して、人生とは何かを、自分の目で確かめてみようというわけです。経験が豊かであれば、想像力はそれだけ豊かになります。ですから、みなさんも広い社会に出て、たくさんの経験をつんでください。

人間らしさの代表格である「やさしさ」「思いやり」「隣人愛」といわれるものは、考えてみれば、みんな想像力の賜物といえるでしょう。

異国の人になれないバスに乗っていて、降りるべきバス停にいつ着くかわからず、キョロキョロと窓外を見やっていると、その外国人に、「何か、お困りのことがありますか」

と尋ねるのは、その外国人が困っていきうだと想像することから生まれるのです。人間らしい想像力が、そういう言葉をかけさせるのです。それが人としての自然な振る舞いではないでしょうか。

このように見てくると、考える際にものをいうのは、「豊かな想像力」、いくなれば「全人的な想像力」ではないか、と考えられます。

想像力が豊かであればあるほど、人の悲しみがわかり、思いやる心が育つのではないのでしょうか。

(小島俊明「ひとりで、考える―哲学する習慣を」)

〔注〕

※珍重…珍しいものとして大切にすること。

※浪人…主君のもとをばなれた武士。

※くすぶる…身なりがあまり良くないさま。

※機微…表面からは知りにくい微妙な心の動きや物事の趣。

※しかと…しっかりと。

※賜物…よいことや試練などの結果与えられた成果。

〔問題3〕

いやあ、みがくのはよそう。また小判が出るといけないという表現の面白さ、良さについて、あなたが考えたことを四十字以上五十字以内で書きなさい。ただし、後の〈注意〉にしたがうこと。

〔問題4〕

人間らしさの代表格である「やさしさ」「思いやり」「隣人愛」といわれるものは、考えてみれば、みんな想像力の賜物といえるとはどういうことですか。あなたの考える具体例をあげながら、筆者の考えにそって百八十字以上二百字以内で書きなさい。ただし、次の〈注意〉にしたがうこと。

〈注意〉

- ・段落を設けず、一まず目から書きなさい。
- ・「や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の文字と同じます目に書きます。この場合、最後のます目に書いた文字と記号で一字と数えます。
- ・「と」が続く場合には、同じます目に書いてもかまいません。この場合、「。」で一字と数えます。